

<2019年度 第2回定例研究会>

第1部

ソーシャルワークの研究 — 知識構築の歴史的動向 — に学ぶ

講演：平塚 良子（大分大学名誉教授、前西九州大学教授）

日時：2019年7月20日（土）13時～14時30分

平塚良子先生は、ソーシャルワーク研究の歴史に造詣が深く、講演内容は先行研究に裏づけられた学術性の高いもので、本研究所の地域貢献事業を学術面から提起する初回に相応しい内容であった。

なお、本研究会の講演は演者の了解をえて撮影・編集し、今後の研究所の取組に映像資料として活用されます。本報告は、講演の論点を中心にまとめています。映像資料視聴の参考にしていただきたい。

○ソーシャルワーカーへのメッセージ

冒頭、平塚先生は講演テーマ「ソーシャルワークの研究 — 知識構築の歴史的動向 — に学ぶ」について、「ソーシャルワーカーはソーシャルワークの知識構築の要」とメッセージをおくった。

○ソーシャルワークの知識をつくりあげて考えることの大切さ

○ソーシャルワーク研究では、実践が何であるかを明らかにする

○ソーシャルワーク実践は知識を必要とする。

ソーシャルワーク実践に必要な知識とは、実践に有用ないし適用可能であり、かつ利用者や社会にとって有益な知識である必要がある。

○知識の種類として主に2つに注目できる。

1つ目は理論知ないし（狭義の）科学知。2つ目は実践理論ないし実践知。

○ソーシャルワークの3つのルーツ

1. 人道主義（ヒューマニズム）、2. 実用主義（プラグマティズム）、3. 実証主義

○ソーシャルワークという用語の登場について

○アメリカ・ソーシャルワークにおける知識構築をめぐる論点（1）

ソーシャルワークは「アートとサイエンスか」、「アートかサイエンスか」、「アート>サイエンスか」をソーシャルワーク実践とリンクさせて考えてみよう。

○実証主義に苦闘するソーシャルワーク

ソーシャルワーカーは学術性に訴えるよりも、実用性優先や政治的なパワー行使による社会変革的な役割と手法を優先してきた歴史がある。しかし、理論を身につけることなくこれらの手法に頼ることはソーシャルワークの対象となる人々に貢献できるかといえるか疑問である。

○アメリカ・ソーシャルワークにおける知識構築をめぐる論点(2)

「ソーシャルワークの発達」はソーシャル・ケースワーク、ソーシャル・グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションの専門的実践方法の発達と関連する。しかし、こうした単次元の実践理論志向には陥穽がある。いかに科学的なものが求められても統合的な概念もなく、ソーシャルワーク全体を表す理論もないのではないか。

○諸科学利用型による実践方法の組み立て

社会学、心理学、哲学や思想など諸科学の理論を借りてきて、実践の方法に組み立てていく。この状況が今日まで続いている。これで私たち独自の知識はできるのか。

○ソーシャルワークの学術性の二つの疑問。

1つ目は応用科学(applied science)と言われるが、基礎科学は何か。2つ目は「諸科学」を借りるといふ手法に学問的自立性があるか。

○ソーシャルワークの知識構築の課題の一つは、強みをいかしていないことにある。

実証主義の勢力拡大は、調査研究を増加させ、エビデンスを導きだしてきた。しかし、導き出されたエビデンスはソーシャルワーカーにとって有用だろうか。トールは「Headless machineになるな!」と警告し、現場で見聞きしたこと、記録に残したことからにじみ出てくる考えを実践研究すべきと主張する。私たちの強みは、実践していることを基本におくこと。実践を介して理論をつくっていくしかない。岡本民夫先生(本研究所8代所長)は、実践研究から自生理論をつくっていくないと本物にならないと述べる。また実践科学という言葉をつかって、科学的実践もとても大切だが、実践を科学として耐えうるかどうか検証しないとイケないとし、それを「実践の科学化」と述べている。

○ソーシャルワークの知識～平塚良子先生の考え

知識というのは、自然科学の世界のような理論知あるいは科学知と呼ばれる知識だけを導き出すこともありうる。ただ、実践の強みをいかすとすれば、知識のもとはどこにあるのか。それはソーシャルワーカーの頭脳のなかにある。自分はその時、どういう風に考えていたのか、問いを立てていく、そして整理していくことが必要である。また人権尊重など重要な言葉が並んでいるけれども、価値が正しく適切に活用されているのだろうか。恩師・嶋田啓一郎先生は、「人間の悪の問題と対峙しなければならない」とおっしゃった。現代社会では、とても説明のつかない問題が福祉の世界でも起きている。何が成功している実践なのか、何が失敗している実践なのか。そういうことを追求しているなかで、これは知識として大事なことだと見えてくるはずである。ソーシャルワーカーの経験したことを無駄にしない知識の整理の仕方に取り組んでいくことが必要である。

実践の知を軸足にしつつ、科学の知や規範の知にひろがっているようなソーシャルワークの知のスペクトラムができないものか。

○ソーシャルワークの強み

(1) 実践者と研究者が協働で研究する実践研究を原点にすること。

その際、①クライアントから学ぶ、②ソーシャルワーカーの実践という行為を原点にすること。実践をもつ強みを活かすこと、そしてそれを検討する中で行為の根拠が見える化(可視化)すること。

(2) ソーシャルワーカーの強み「アートの知」は、自分の中に溜め込まれた知 pooled thinking : 実践の知を活かすこと。それから専門職集団が知識として作りあげていること (group thinking) を活かすこと。最後に、学問はここから始まると締めくくられた。

第2部 意見交換 研究機関と職能団体の連携の意義

進行: 黒木 邦弘 (熊本学園大学付属社会福祉研究所長・社会福祉学部准教授)

コメンテーター: 平塚 良子 (大分大学名誉教授、前西九州大学教授)

日 時: 2019年7月20日(土) 14時40分~15時40分

第二部では、熊本県社会福祉士会・熊本県精神保健福祉士協会・熊本県医療ソーシャルワーカー協会の3団体の共催を得て、職能団体と研究機関か?連携する意義について意見交換をおこなった。なお、今回の研究会は、ソーシャルワーカーデーを兼ねて開催したものである。意見交換では、職能団体の中で蓄積された知について、以下のこれまでの研修テーマを参考に報告していただき、議論を進めた。以下、各団体の研修テーマである。

○(社) 熊本県社会福祉士会

報告者: 永田直往 (副会長)

2015年度 本県における「生活困窮者自立支援法」施行の取り組みについて

2015年度 「子ども・子育て支援新制度」について

2017年度 水俣病と社会福祉

2018年度 幸せな地域医療を目指して~高齢者を使い倒せ!~

2019年度 多様な働き方に向けての働き形改革

○熊本県精神保健福祉士協会～総会研修会テーマ 報告者：木ノ下高雄（副会長）

平成 27 年度「これからの精神保健福祉士の課題～求められる役割と専門性～」

平成 28 年度「災害支援と精神保健福祉士～ソーシャルワーカーだからできることとは？～」

平成 29 年度「精神保健福祉施策の変化と精神保健福祉士の役割」

平成 30 年度「誰もが安心して地域で暮らせる地域づくり」

令和 元 年度「メンタルヘルス“ソーシャルワーク”への期待と責任

【立ち止まって考えるための 10Topics&10Facts】

○一社）熊本県医療ソーシャルワーカー協会 報告者：野方啓次（副会長）

・地域包括ケアシステムと SW の役割 ～実践者の過去・現在・未来～

・地域包括ケアシステムにおける SW の役割と期待されるもの

・専門職としての効果的なコミュニケーションスキル～あなたを高める NLP とソーシャルワークスキル～

・2018 年度報酬改定におけるソーシャルワーカーの役割・機能とは

・病院から“地域”へ～これからのソーシャルワーカーへ求めるもの～

※2018 年度より年間テーマを策定し、テーマに沿った研修企画を実施

2018 年度：「ソーシャルワーク実践」 2019 年度：「ソーシャルワーカーの基本」

意見交換では、熊本県内の福祉系職能三団体の実践の知の蓄積の一面について、研修テーマと背景を知る機会を得た。また三団体は、熊本地震を契機にソーシャルワーカーデーを合同開催するなど関係を深めていることも紹介された。コメンテーターの平塚先生から三団体の協働を強みに、実践を語る場の必要性が提起された。最後に、まとめにかえて、試行的にソーシャルワーカーがソーシャルワーク実践を語る場を設けるなど研究機関と職能団体の連携の必要性を確認した。

(研究会報告者：黒木邦弘)